

スロベニア スロベニアの日本研究 : リュブリ  
ャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科

著者	川島 尚宗
雑誌名	世界の日本研究
巻	2013
ページ	91-93
発行年	2013-10-18
その他の言語のタイトル	Surobenia no nihon kenkyu : Ryuburyana daigaku bungakubu ajia, afurika kenkyu gakka
特集号タイトル	日本研究の新しい動向 New Trends in Japanese Studies
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00003666">http://doi.org/10.15055/00003666</a>

## スロベニアの日本研究

——リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科

川島 尚宗<sup>1</sup>

リュブリャーナ大学はスロベニアの首都リュブリャーナに所在する。スロベニアはかつてユーゴスラビアに属していた、人口約 200 万人、国土面積約 2 万平方キロメートルという小さな国である。近年、観光面で注目を集めているとはいえ、日本企業の進出はほとんどなく、日本人は約 130 名が居住するのみである。ただ、日本に対する関心は高いようで、入学する学生のほとんどが日本研究を第一志望としている。スロベニアの大学で日本研究を専攻できるのはリュブリャーナ大学のみであるが、第二の都市に所在するマリボル大学や、文化センター・語学学校でも日本語を学ぶことができる。

リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科は 1995 年に設立され、日本研究講座・中国研究講座を中核としながら、韓国語・ヒンディー語などの授業も提供している。当学部では 2009 年 10 月よりボローニャ・システムが導入されており、学部が 3 年、修士課程が 2 年となっている。2012 年 10 月から修士課程が開始される予定である。日本研究講座では創設以来、より多様なテーマで日本研究が行えるよう他学科と協力してダブル・メジャー制を採用してきたが、ボローニャ・システムが採用されてから、日本研究講座のみを専攻して卒業できるシングル・メジャーも選択できるようになり、日本語・日本文化の学習により時間を費やすことができるようになった。また、当学科には東アジア文化講座も併設されており、日本・韓国・中国について広い視野で学ぶこともできる。

日本研究講座への入学者数は年々増え続けていたが、授業数の増加などの事情により、次年度から入学枠を 30 名程度へ減らすことになった。教員は現在 8 名（うち 3 名が日本人）で、日本語学以外の分野（政治学・文化人類学・宗

---

1 元リュブリャーナ大学専任講師、現筑波大学人文社会系研究員。

教社会学・考古学)を専門とする教員がおり、「日本研究」という名にふさわしい授業を提供できるようになってきた。これらの教員は、日本の大学で博士課程に留学した当学科の卒業生がほとんどであり、学科として日本への進学を勧めてきた結果といえよう。このような日本の大学院への進学的基础となっているのが学部生の留学である。当学科は、筑波大学・群馬大学・東京外国語大学・東京工業大学など日本の複数大学と交流協定を締結しており、大学間での学生の移動を促進している。このため、国費留学などの枠外でも交換留学生として留学することが可能となり、短期研修も含めて毎年10名以上が日本で留学や研修の機会を得ることができる。同時に、筑波大学・東京外国語大学・日本女子大学より日本語教育実習生の受入れを行っており、それぞれ2週間程度の実習を提供している。ほかにも、スロベニアにおける異文化体験学習も提供しており、東北福祉大学・筑波大学から毎年数名ずつ学生が訪れている。半年を超える日本からの長期留学生はほとんどいないものの、このような機会を通じて日本の学生との交流が行われている。

2012年5月現在の在籍者数は、1年次112名、2年次45名、3年次21名である。1年次の数が多い理由は留年によるものである。進級が困難であるにもかかわらず、日本研究の人気の高いことを示しているだろう。シングル・メジャーの例にとどめるが、必修科目を紹介しておきたい。1年次に現代日本語Ⅰ、日本語表記・方法論Ⅰ、東アジア史、2年次に現代日本語Ⅱ、日本史入門Ⅰ・Ⅱ、日本語文法Ⅰ・Ⅱ、3年次に現代日本語Ⅲ、日本社会学、日本文学入門、卒業論文セミナーを履修する。これに加えて、選択科目も用意されており、シングル・メジャーの場合、1年次よりアジア宗教学、日本社会学などを履修することが可能である。ただ、方法論などの面でシングル・メジャーの学生の専門性を高めるには課題が残されており、卒業論文をまとめる際などにはダブル・メジャーの方が有利かもしれない。修士課程にも同様にシングル・メジャーとダブル・メジャーが用意されている。シングル・メジャーの例を見ると、1年次には、日本語メディア表現研究翻訳論、日本語学特講1・2、コーパス言語学、日本古典語特講1・2、日本語学術表現研究翻訳論1、2年次には日本語学術表現研究翻訳論2、日本語翻訳研究、修士論文セミナーが必修科目となり、日本語を運用してより専門性の高い内容が学べる科目が用意されている。ほかに、選択科目として文学・社会学・日本語教育法などが提供され、学生各自の専門

分野に対応できるものと考えられる。

さて、日本研究という視点で当学科を見てみると、学科創設以来、日本語学中心のスタッフ構成であったが、先に述べたようにより多様な分野をカバーできるようなスタッフが揃ってきている。もちろん、日本語の授業も担当するけれども、社会学や歴史学の分野に関連する授業が充実してきた。これらの基礎となるのは教員各自の研究活動であり、事実、日本での調査・資料収集など研究活動は活発に行われている。ヨーロッパにおいても、EAJS (The European Association of Japanese Studies) や日本語教育連絡会議での発表などによって研究成果を発信している。2012年3月、ルーマニアのブカレスト大学で行われた研究会に同僚数人と参加した際、日本語学だけにとどまらずさまざまな分野の発表が行われ、日本研究の幅が広がりつつあることを実感した。参加者も中欧・東欧地域から広く集まり、研究者同士の交流が持たれた。リュブリャーナ大学でも地理的な特性を活かしながら、研究ネットワークの拠点となるべく、毎年3月にシンポジウムを開催している。毎年3月には異文化体験プログラムが行われており、日本からのプログラム生だけでなく先生方も滞在されることが多い。このシンポジウムでは日本の大学の先生方のほか、中東欧の研究者にも参加を呼びかけ、情報の交換・発信に努めている。リュブリャーナ大学は2014年に開かれるEAJS第14回大会の開催校となっており、中欧における日本研究の拠点のひとつとして、今後も活発な教育研究が行われると考えられる。